
テイルズオブジアビス～氷影の少女～

黒一文字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブジァビス〜氷影の少女〜

【Nコード】

N3282V

【作者名】

黒一文字

【あらすじ】

彼女は人助けをして死んだ。彼女は新たな人生をどのように過ごすのか？

プロローグ（前書き）

黒「はい、黒一文字です」

シィ「作者のオリキャラのうちの一人、結衣咲シィです……いきなりだね」

黒「しょうがない。ネタが出来ずにこの小説のネタが出来たから」

シィ「……はぁ」

黒「それではプロローグどうぞ」

プロローグ

．．．．．ここはどこ？

ここは生と死を司る世界

．．．．．生と死？

そう．．．．．汝は．．．．．

．．．．．死んだよね？

その通り

．．．．．そうなんだ。それじゃ私は死の世界に行く途中なんだ

だが、汝は人助けをした。それも数え切れないほど。そこで汝は『転生』をしてもらう

．．．．．転生？

そう、我の力で汝の元いた世界とは違う世界にだ

．．．．．わかった

どこになるかわからないが、新たな人生を楽しめ

・
・
・
・
・
はい
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
神様
・
・
・
・
・

ブログ（後書き）

黒「更新は不定期になりますのでご了承ください」

プロローグ2（前書き）

「???」こんにちは???です・・・・・・て何ですかこれ!？」

黒「いや、前書きだしネタバレになるし」

クレス「ま、いいんじゃないかねえか？あ、因みに俺は『バカとある兄妹と召喚獣』のオリキャラ、クレス・エステイドだ」

「???」・・・・まあ、いいでしょう。それではどうぞ」

ブローグ2

ギアアツギアアツ…………

…………何かの鳴き声が聞こえる。しかも、聞いたことの無い鳴き声…………少なくとも、ここは地球ではない。

ザシュツ

…………これは…………何かを切った音？

「ほう、ここに人がいるとはな。お前の名は？」

切った音が聞こえた方向から髭があり、長い髪を後ろに縛った人が来た。

「……………」

私はこの質問に対して答えるのを躊躇った。この世界で前世の名前を名乗ってもいいのだろうか？

「ふむ、失礼。私が名乗らなければいけなかったな。私の名はヴァン・グランツ。
オラクル神託の盾騎士団主席総長だ」

髪の長い人、グランツさんが自己紹介してくれた。

「えと…………ユエです」

しょうがないので私は前世の名前を使わず、適当に答えた

「ユエか……どうしてここにいるのだ？」

「……………迷ってしまいました」

「そうか、なら私についてくるがいい」

それから私はヴァンさん（妹がいるらしく、この呼び方にしてくれと言われた）から色々な話を聞いた。因みに私は名前以外覚えてないという事にした。

「ユリアの預言^{スコア}……………」

「そう、私はスコアを憎んでる。だから、私は世界を変える。だからユエ……………私に協力してくれるか？」

世界ををレプリカの世界に変える。人が沢山死ぬ。嫌だ、死なせたくない。だけど

「……………はい、わかりました」

形だけならいいよね？

森を抜けるとそこには町があった

「では、ようこそ、ローレライ教団総本山『ダート』へ」

プロローグ2（後書き）

テイルズroom

ユエ「あの……ここは？」

黒「ん、『テイルズroom』」

ユエ「そういうことではなくて！」

黒「今まで『バカテスroom』、『ネギま!room』で、作ってきたから」

ユエ「……そうですか」

ヴァン「作者殿」

黒「ん？」

ヴァン「次は主人公の設定と聞きましたが」

黒「ええ、そうですよ」

オリジナルroom

シィ「えと……」

クレス「作者が……」

シイ&クレス「敬語を使っている!？」

ドドドドドドドドドドドバンッ

黒「失礼な！」

クレス「離れてるのに聞こえたのかよ!？」

シイ「悪魔の地獄耳!？」

黒「……」

黒「それではここでお別れです」

シイ&クレス「……」

「...」(合掌)

設定（前書き）

黒「はい、今回はユエの設定とこの作品の設定です」

クレス「何故かあのゲームからの技が秘奥義となってるが……」

黒「それではどうぞ」

設定

主人公設定

ユエ （苗字無し）

年齢 14歳（原作開始時）

容姿 髪は灰色でロング。服装はアリエッタの決戦服に似ているが全体的に青に近い

しよつふおにム
使用音素 基本的に水（氷）と闇、セフンスフオニム 第七音素

呼び名 氷影のユエ

秘奥義

その一『ニーベル・ヴァレスティ』
『スターオーシャン』より。槍に第七音素を凝縮させ、地面に投げると凝縮された第七音素が爆発し、ダメージを与える。無防備だと消し飛ぶ

その二『???』

まだ不明。後に出てくる

原作開始二年前に転生し、ヴァンと出会って神託の盾に入団する。
アリエッタ、アニスと友人関係

原作との比較

六神将 七神将

第六師団長カントビレ ユエに

設定（後書き）

クレス「……『スターオーシャン』かよ！？しかも、破壊神の技だし！？」

ユエ「何となくやったら出来ました」

シイ「何となく！？」

クレス「シイに並ぶチートだな」

シイ「酷い！？」

ユエ「それでは次回、『神託の盾とある日常』……お楽しみにです」

神託の盾のとある日常（前書き）

ルーク「作者！俺の出番は！？」

黒「まで、まだ一話目だ。二年前だ」

ルーク「…………チツ」

ギィ……………ボタン

ユエ「作者さん」

黒「何だ？」

ユエ「無理矢理すぎです」

黒「主語が無いけど気にしない！」

神託の盾とある日常

三人称 side

「今日から私の部下となるユエだ」

「えと……. 宜しくお願いします」

「アリエッタ……. です」

「ラルゴだ」

「あと、ここにいないがアッシュ、リグレット、ディストがいる」

「そうなんですか」

「ではラルゴ、ユエの面倒を見てくれ」

「わかりました、総長」

ギイ……. バタン

「アリエッタ……. イオン様のところに行ってくる」

ギイ……. バタン

「さてと、ユエだったか？」

「はい」

「総長から聞いた。記憶喪失なのだろう？」

「そうだと・・・思います」

「フォニック文字はわかるか？」

「・・・はい？」

「仕方ない。まずはフォニック文字を覚えようか」

「はい！」

??? side

「・・・？」

僕は礼拝堂から見た光を元に来たが変わった様子がない・・・

だとすると

「詠んでみますか」

僕は礼拝堂に安置してある譜石を詠んだ。

「変わった部分は……これでしょうか？……ND2016、偉大なる力を持つ者、ダアト南西の森に現れる。祖は灰色の髪の少女なり。名をユエと称す」

……名前が古代イスパニア語で書かれていない？

「ND2018、ローレライの力を継ぐ若者、人々を引き連れ鉱山の町へ向かう。しかし、偉大なる力を持つ者、咎とされる力を封じる。結果、栄光を掴む者、咎とされる力を使い、町を消滅す」

……変わってる。以前見た預言よりも。

『イオン様！』

声の方を見るとフォンマスターガーディアン導師守護役のアリエッタがいた。

「イオン様、ふらふらしてる」

「え？」

言われてみれば、確かに視界が揺れているように見える。

「……イオン様」

「アリエッタ、僕の部屋に」

「……はい」

ND2016・レムガーデン・レム・2の日

『（日本語）今日から日記をつけることになりました。ヴァンさんに「また記憶喪失になったときの為だ」と・・・フォニック文字がわからない。でも、顔が怖いけど優しいラルゴさんに教えてもらって感謝です。また、何故か武術が使えるので明後日模擬戦をすることになりました。いきなりすぎです。では、ここまでにします』

神託の盾のとある日常（後書き）

クレス「ああ、ユエが無理矢理といったのは預言のことか」

ユエ「はい」

シィ「確かに無理矢理だね」

椎名「浅はかなり」

クレス「いきなり入ってくるな！」

椎名「っ！？」

ガキンッ

クレス&椎名「……………ッ！？」「」

ユエ「……………さて、今後もしょろしくお願いします」

シィ「誰に対して？」

ユエ「読者さんです」

模擬戦（前書き）

ユエ「タイトル通りですね」

黒「ユエがチート化？する回です」

クレス「……………突っ込まないように」

模擬戦

ユエ side

「それでは、行くぞ」

「はい」

どうもこんにちは。現在私は神託の盾の本部にてラルゴさんと模擬戦をするところです。

．．．．．いきなりでしたね。それではわかるように二日前の出来事を

回想（二日前）

「うゝ」

私は自室でラルゴさんに習ったフォニック文字の練習をしていましたが．．．．．難しいです。文法はラテン語に似ているのですが．．．

「読めますけど書けません．．．．．あ」

ふと私は体を動かしたいなと思い、神託の盾本部に行きました。

・・・

フォンッ

槍を一振りする。

大体感覚が掴める。生前、趣味として薙刀を振るっていたので槍の扱いが簡単に掴めた

「・・・・・・・・だれですか？」

気配を感じ声を出す

「バレていたか」

柱の影からラルゴさんが出てくる

「訓練中か？」

「いえ、体を動かしたいなと思ったので」

「そうか」

ラルゴさんは少し考え事をして

「模擬戦しないか？」

申し込まれました

回想終了

三人称 side

「では、行くぞ」

ラルゴは身の丈ほどある先が鎌の槍を構える

「・・・・・・・・はい」

ユエも身長 of 1.5 倍ほどの先が十字の槍を構える

「・・・・・・・・」

静寂が走る

「フッ！」

ラルゴが横薙ぎに振るう

「・・・・・・・・ツ！？」

ユエはそれを流すように受ける

「これならどうだ！」

ラルゴは獅子の形をした闘気を放つ。それを横に避ける

「……………氷の刃よ、降り注げ……………」

ユエは詠唱する。それを見てラルゴは

「（F O Fを無視だと！？）」

「……………アイシクルレイン」

「ゲウツ！？」

氷の刃がラルゴを襲う。その間に

「（……………瞬動）」

後ろに回り込む、が……………

ガキンッ

「……………ッ！？」

ラルゴの槍により、防がれる。しかし……………

「ムッ！？」

後ろの影から三本の槍がラルゴの動きを封じ込める

「・・・・・・・・」

再び静寂

「・・・・・・・・俺の負けだ」

ラルゴが敗北の意思を伝える

ユエ side

ラルゴさんに勝ってしまいました。ビックリです

「ユエ、何だ？これは？」

ラルゴさんは影から出ている刃物に視線を向ける

「あれは操影術といい、私の意思で動かせます」

と言いながら三本の影の槍を操作する

「なるほどな」

ND2016・レムガーデン・4の日

『今日はラルゴさんと模擬戦をしました。結果は私の勝利でした。』

その後ラルゴさんとの訓練で見つけた事は第一音素と第四音素の譜術全てが使えることがわかりました。槍術は多くの技が出来ました。天雷槍や第四音素を槍に含ませ、振るうと辺りが凍ったりしました。操影術のうちの影槍も訓練で百本以上を全て操作できるようになりラルゴさんから「チートだな」と言われました。酷いです。今日はここまでとします』

模擬戦（後書き）

黒&ユエ「エミル・キャスタニエ様、白蓮様、感想ありがとうございます」「

クレス「そしてこの小説のPV3500、ユニーク10000到達だ」

ユエ「この小説、今回をいれて五話しかないですね？」

黒「ああ」

クレス「そして作者。言うことは？」

黒「中々更新できずにすみません」

ユエ「はい、それでは皆様」

黒&ユエ「次回もお楽しみに（です）！」「」

クレス「因みに俺がこの掛け声に参加しないのはこの小説の登場人物じゃないからだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3282v/>

テイルズオブジァビス～氷影の少女～

2011年11月13日08時17分発行